知的障害児を持つ保護者へのペアレントトレーニングの効果

—保護者の養育スキルの変化に焦点を当てて—

○松本将平　　半田　健
（三重県スクールカウンセラー）　（国立特別支援教育総合研究所）

KEY WORDS: ペアレントトレーニング、養育スキル、知的障害

（目的）

ペアレントトレーニング（以下、ペアトレとする）は広く効果が認められている支援であるが、保護者への効果をより客観的な指標を用いて評価する必要性が指摘されている（原口ら，2013）。本研究では知的障害児を持つ保護者に対してペアトレを行い、保護者の変化を質問紙によって評価した。特に保護者の養育スキルに注目し、本ペアトレが保護者に及ぼす影響を検証した。

（方法）

1．参加者

本ペアトレは、G 県障害者就業・生活支援センターによって主催された。参加者は同センターにて支援を受ける保護者で、同センターによって呼びかけられた。参加者は年長から中学生までの知的障害児を持つ保護者 6 名であった。また、周辺地域の発達障害児・者支援に関わる職員数名が不定期でプログラムに参加した。

本研究は参加者に対して研究目的や内容、守秘義務の遵守、研究成果の公表等に関する説明を書面と口頭で行い、研究参加の同意を書面で得て実施した。

2．スタッフ

ペアトレ実施経験のある臨床心理士 1 名がメイントレーナーを務め、講義やワークの進行を行った。センター職員 2 名、G 県内で発達障害児・者支援に関わる職員 4 名がサブトレーナーを務め、進行の補助を行った。また、サブトレーナーはペアトレの運営に初めて携わった。

3．設定

X 年 10 月～X 年 12 月まで、隔週を基本に全 5 回、1 回につき 2 時間実施した。欠席者にはサブトレーナーが個別に面談を行い、該当回のプログラムを実施した。

4．手続き

プログラムは嶋崎ら（2006）を一部修正し、問題行動の代替行動である適応行動を強化することに重点を置いて行った。前半に講義、後半にワークを実施した（Table1）。各セッション終了前には参加者が 2 グループに分かれ、ホームワークや結果をシェアした。標的行動の生起が安定したとメイントレーナーが判断した場合、保護者は新たな標的行動を設定した。

5．評価方法

（1）子どもに関する評価

#1～4 にはホームワークが出され、保護者が子どもの標的行動を毎日記録した。

（2）保護者に関する評価

以下の質問紙について、#1 プログラム実施前と#5 プログラム終了後に回答を依頼した。

Table1 プログラム内容

	#1	#2	#3	#4	#5
講義	行動の定義 記録方法	強化	消去 ABC分析	振り返り	表彰式
ワーク	標的行動の決定	強化子査定 スモールステップ	ABC分析	介入計画修正 新たな標的行動 の決定	
ホーム ワーク	BL測定		標的行動測定 標的行動の強化		

1）KBPAC 日本語版

保護者の行動理論に関する知識の変容を評価するため、25 項目の質問で構成される KBPAC 日本語版（簡略版；志賀，1983）を用いた。

2）Parenting Scale 日本語版

保護者の不適切な養育行動を測定するため、30 項目の質問で構成される Parenting Scale 日本語版（井潤，2010）を用いた。本質問紙は保護者が実際にどのようなしつけ方略をとるか尋ねるものであり、OVR 因子（過剰反応）および LAX 因子（緩さ）から構成される。

（結果）

1．標的行動

全保護者の子どもの標的行動に改善が見られた。

2．KBPAC

KBPAC の得点は全保護者の得点が増加し、平均得点はプログラム前が 9.5 点、プログラム後が 16.2 点であった。

3．Parenting Scale

Parenting Scale の全体得点は全保護者で減少し、平均得点はプログラム前が 56.7 点、プログラム後が 49.2 点であった。因子別に見ると、OVR 因子の平均得点はプログラム前が 36.2 点、プログラム後が 29.8 点であり（Fig.1）、LAX 因子の平均得点はプログラム前が 20.7 点、プログラム後が 19.3 点だった（Fig.2）。

（考察）

これらの結果、参加者にとって本ペアトレが有効であったと示された。Parenting Scale の因子別結果を見ると、OVR 因子（過剰反応）の得点が減少し、LAX 因子（緩さ）の得点はほとんど変化しなかった。これには、本ペアトレのプログラムが特に適応行動の強化に着目して構成されていたことが影響したと考えられる。OVR 因子については、参加者が適応行動を強化することで問題行動へ効果的に対応できると学び、問題行動へ過剰反応することが減ったと推測される。一方で、LAX 因子（緩さ）には消去に関する項目が多く含まれる（例えば「私は子どもにしつこくせがまれたとき、それを無視できる」など）。本ペアトレでは講義では消去が取り上げられていたものの、ホームワークにおいては適応行動の強化を実施することが重視された。そのため、消去の手続きが十分に習得されなかったことで、LAX 因子（緩さ）の得点が変化しなかったと推測される。

（MATSUMOTO Shohei，HANDA Ken）

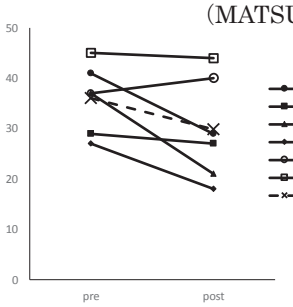

Fig.1 ParentingScale OVR因子

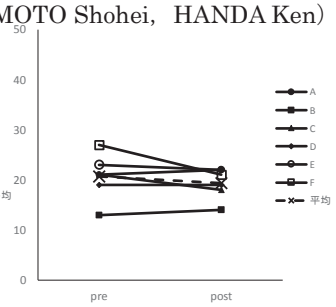

Fig.2 ParentingScale LAX因子